



「武器をアートに」することの意味

竹内よし子 (たけうち・よしこ) 特定非営利活動法人えひめグローバルネットワーク代表理事／平成29年度外務省NGO相談員

高校卒業後、渡英経験および企業や研究機関での職務経験を経て故郷・愛媛に戻る。1998年4月、えひめグローバルネットワークを設立。モザンビーク「銃を鋏へ」平和構築支援などの海外事業と、国内の地球市民教育の普及やネットワークづくりに携わる。



武器アートが示すもの

モザンビークとの出会いは、国際協力に関する勉強会がきっかけでした。農業支援とか、医療支援とか、いろいろな国際協力活動がありますよね。その中で、良い形、モデルとなるものは、どういふものだろうと話し合っていた中に、「銃を鋏



へ」という、内戦が終わったモザンビークの市民たちが自ら立ち上げたプロジェクトがありました。武器を農具や自転車、ミシンなどと交換で回収してアート作品にするんです。平和構築のために武器を回収するという、普通は行政側がやることを市民たちがやっている、そこが面白かったですね。

銃と自転車を交換しましょうといっても、自転車をもらって、武器を手放さないで、ズドンとやったら終わりじゃないですか。そう考えたときに、「銃を鋏へ」というプロジェクトの、回収する行為の中に何かあるんだろうと思いました。

このプロジェクトの中心であるモザンビーク・キリスト教評議会 (CCM) は、まず、村の人たちと話し合います。そして、村長さんが武器を差し出す。それを村人たちが見て、武器を手放そうとするわけです。

そこには、今まで自分の命を守り、家族を守り、戦ってきた人の変化があります。その変化を、どこから押しつけるとかではなく、モザンビークの人たちが自ら、自分たちの国の平和な社会づくりのために、やりたいと。そういう機運が、内戦後のモザンビークで生まれたのです。国が主導権を持つのではなく、CCMが市民教育をやる中で始まったプロジェクト。その活動がすごいなと思って、私たちは賛同し、応援を始めました。

武器は、殺す道具以外の何物にもならないんですね。だから、武器をつ

ることによって、人間がどれだけ愚かな歴史を繰り返してきたか。武器アートは、それを私たちに気付かせてくれます。

つづけること、つなげること

私たちは、始めた段階で、モザンビークの武器がゼロになるように応援しようと思ったんです。そのためにも、継続性というものをものすごく重視しました。

変化とか変容というのは、一夜にしてはできないと思うので、やはり時間がかかりますし、その変化、変容が、その地域の本当の文化にならないといけません。根付くために一番大事なのは、心の武装解除であり、心の壁を乗り越えて信頼関係をつくっていくこと。そこに、10年を費やしたといってもいいと思っています。

国際協力活動をやっている人たちは、専門性が高く、プロとして入っている。だけど、その結果どうなのかといったときに、3年間はやった。成果が出た。でもその後は、となると、むしろ悪くなったり、すたれていたりするのを見ると、そもそも、その3年間の取り組みの意味は何だったんだろうという気がします。

だから、大事なのは、村の人たちの参加なんですよ。上から目線ではなくて、一緒につくろう。そのオーナーシップができなければ、プロジェクトは箱物をつくって終わりなので、意味がなくなってしまう。そこをすごく大事にして、丁寧にやっています。

国際協力って、その国、その地域の、その人たちだけのことを現地限定で、というのが多いと思います。目線としては、だから、支援する人、される人たち、なんですよ。でも、私たちがやっているのは、その地域も、私たちの地域(=日本)も、一緒に持続可能な社会づくりを目指しましょうということ。SDGs※のどれに該当するだろうと考えながら、目標に向かって対等な関係性をつくって、やっています。

今でもモザンビークにはIDを持たない、戸籍のない、誕生日も年も分からない人たちがたくさんいるんです。名前は「マリア」といっても、「書いて」と言ったら書けない。自分の名前さえ書けない、30代ぐらいのお母さんがいたりします。

その社会をどう変えたいのか。方

向性とか、変わっていくには何が必要なのだろうかとか、考えさせられることが多くて。この武器アートは、そういう意味では、私の思いも代弁してくれるし、きっと、たくさんの人の思いを代弁してくれる。亡くなった方たちの無念を晴らしていく上でも、この武器アートに語らせていきたいなと思うんですね。

彼らにとって武器は身近で、女性も、子どもも、殺人者に変えてしまっている存在ですね。誰もミサイルのスイッチを押しに行けないですけど、武器はばらまかれますから。だから、この問題に関して、私たちが無関心でいるのはよくないと思います。

やめていいときまで

私たちがこの活動をやめるとしたら、やめていいときが来たときだと思うのです。私の代では無理だと思います。そう思いながら活動を続けている人は、他にもたくさんいますので、そのネットワークで、変えていく、変わっていく社会づくりに貢献したいです。



武器を…



アートに!

だから、そういうことに賛同する人たちと一緒に、すてきな展示会をいっぱい開きたい。大阪・千里の国立民族学博物館、英国の大英博物館と、あと、アムステルダムやパリの美術館にも武器アートが置いてあると聞いていますので、それらの美術館連携をしたいということも考えています。

戦争に対してネガティブなイメージとか暗いイメージがたくさんあるけれども、それを超えて、武器アートに変える力があれば、私たち人間は、貧困の中からも立ち上がれるし、戦争の後にも平和を望むことができますよね。そう信じて取り組んでいきたいです。

※「持続可能な開発目標」世界のリーダーが2015年9月の国連サミットで採択した持続可能な開発のための2030アジェンダに盛り込まれた17の目標